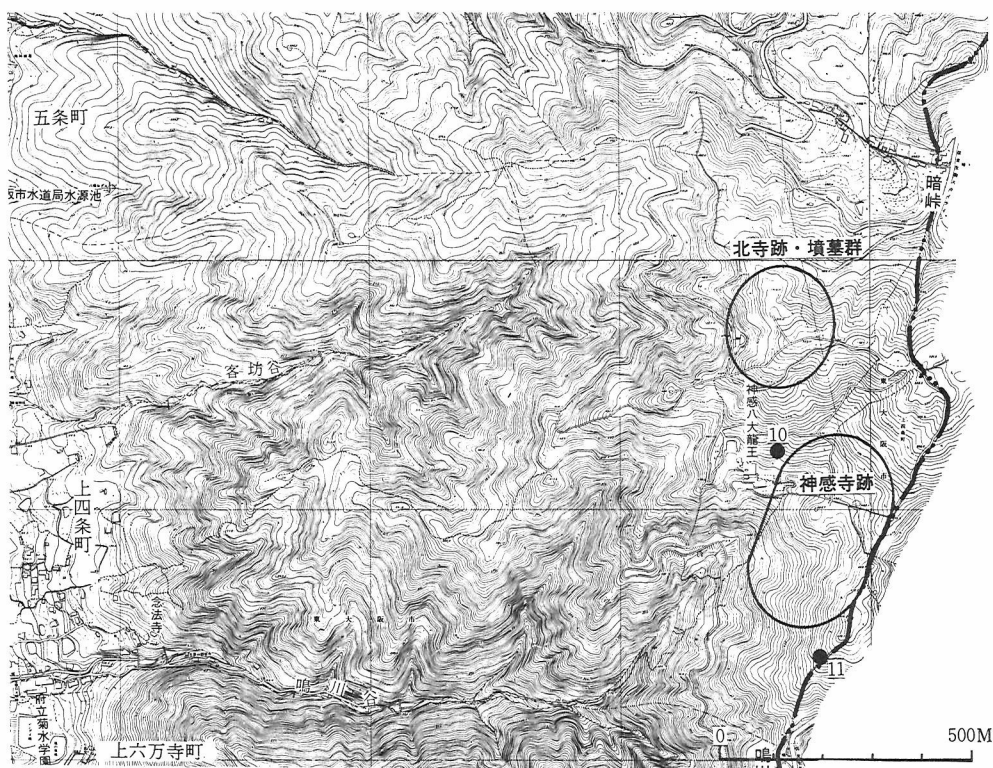


東大阪市域における火葬墓について

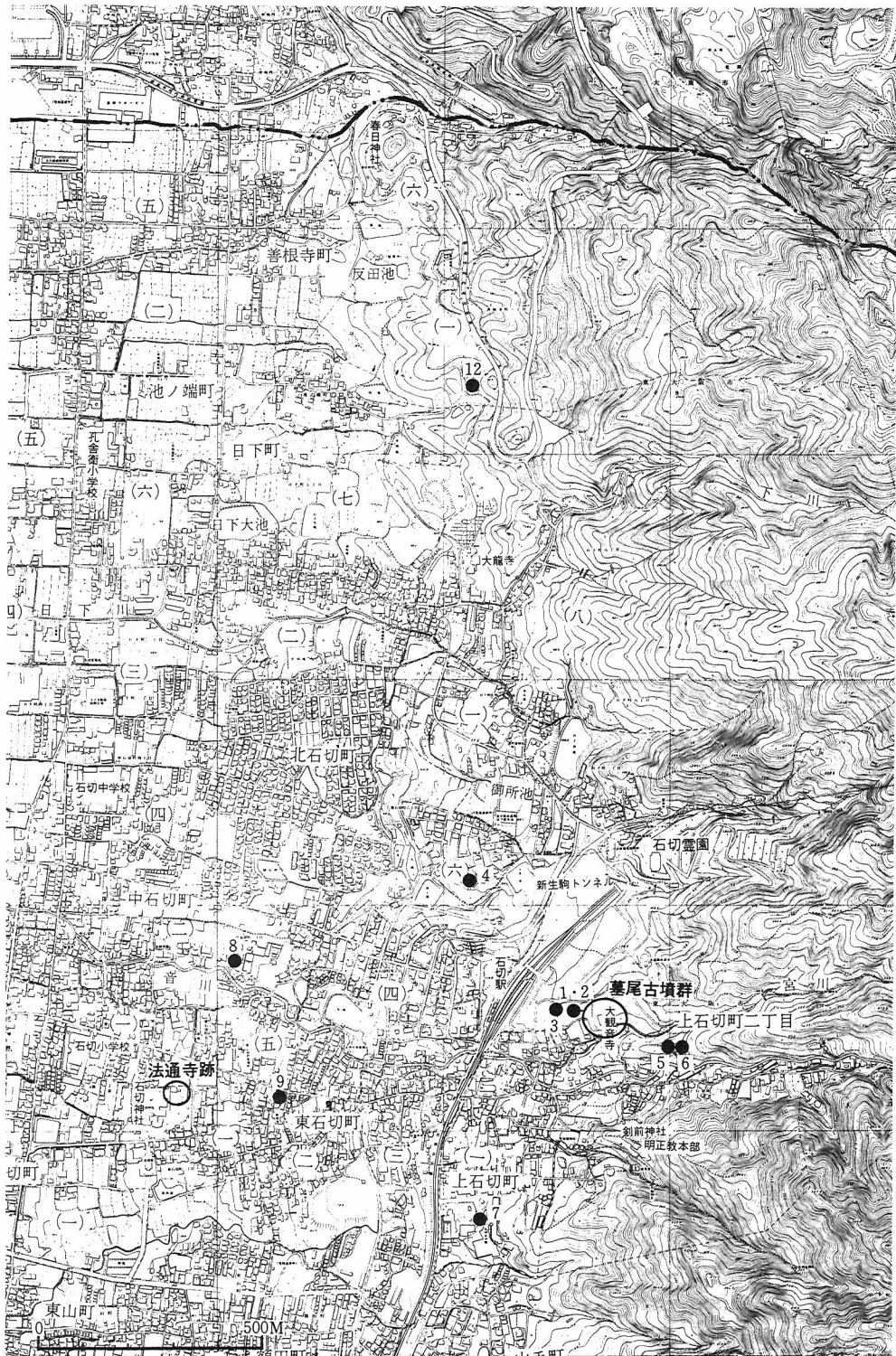
上 野 利 明

I はじめに

東大阪市における開発は、近鉄奈良線周辺を中心として東西に進められてきたが、近年、生駒山地西麓部に広がりつつある。特に石切町周辺における開発は、大規模な宅地造成等もあり、徐々に景観が変わりつつある。このような開発に伴い、古墳のように地表に姿を現わしているもの、あるいは、集落遺跡の如く広範囲に広がるものと異り、発掘調査では異常に出土例の少ない火葬墓の発見が増加し始めている。また、火葬墓は、地表より浅いところに埋蔵されているのが通例で、過去においても相当の火葬墓が発見されている。今回、ここに過去における火葬墓の発見の経過を明らかにし、その出土状況・実体を明らかにすることは、今後の火葬墓の研究の一助になるものと考え、主として平安時代頃までの出土例を紹介した。紹介するにあた



第1図 神感寺周辺出土地点位置図 (1 / 15000)



第2図 石切町周辺出土地点位置図 (1 / 15,000)

っては、中石切町中澄幸彦氏、東大阪市立郷土博物館の方々には、多大なる御協力を頂いたことを感謝する。

Ⅱ 東大阪における出土例

1. 第3図1・2 昭和36年、小格重一氏によって、上石切町一丁目の通称「干手寺山」、西斜面で発見された。墓壇等の施設については不明である。火葬骨が多量に収められていたとされている。

図1は須恵器葉壺である。やや内傾しながら立ち上がる口縁部をもつ。端部は内傾した面をもって終わる。胴部は非常に張りのある肩部より下方にやや丸みをもって屈折する。底部に貼付け高台をもつ。口径12.4cm、底径12.0cm、器高11.0cm。

図2は図1の蓋である。扁平なつまみをもち、やや中央に下がり気味の平らな天井部から、内湾気味に外方へ下がる口縁部へ続く。天井部と口縁部の境には明瞭な稜をもつ。口縁端部は強いヨコナデのため、カエリ状の突起となり鋭く終わる。口径14.4cm、器高3.5cm。

図1・2は平城京SD485出土例よりやや古い特徴をもち、8世紀前半と考えられる。奈良市、松下太蔵氏所蔵。

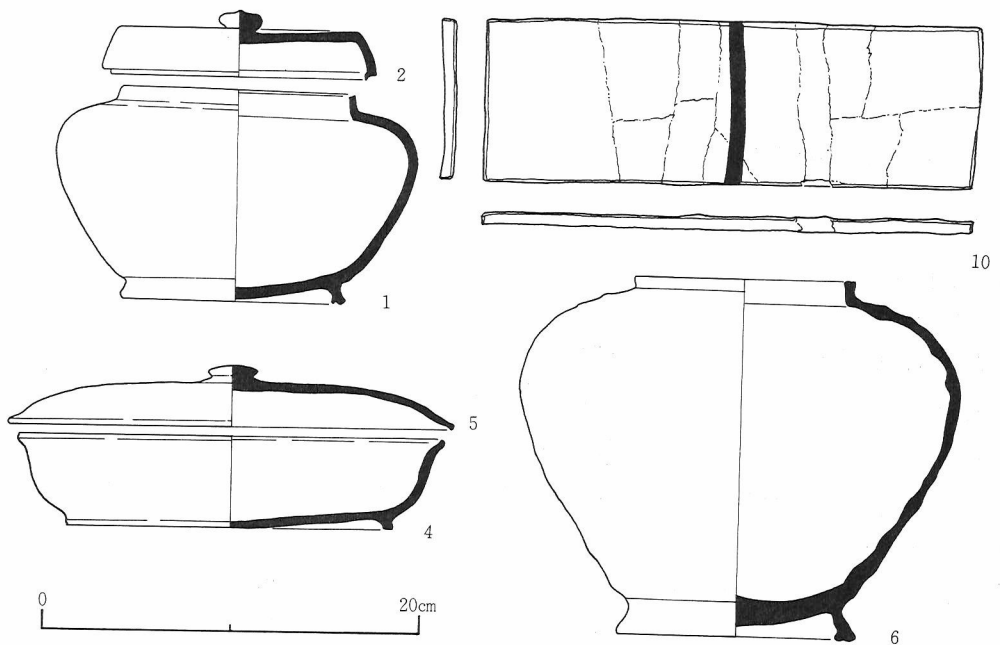
2. 第5図3 図1・2とともに発見された。破片となって採集され、若干の火葬骨があったとされている。須恵器壺で、口縁上部は欠損している。外反する口縁部から張りの弱い胴部に続く。肩部に1対の把手を有する。やや凹み気味の平底である。底径15.5cm、最大腹径26.6cm。平城京SD650B出土例に近い特徴をもち、9世紀後半頃と考えられる。奈良市、松下太蔵氏所蔵。

3. 第3図4・5 昭和53年、東大阪市遺跡保護調査会が実施した発掘調査により出土した。図1～3と同じく干手寺山西斜面に位置し、標高約125m付近である。この一帯はかつて石切ヘルスセンターが建設されていたところで、図1～2はその工事中に、図4・5は駐車場として利用されていたために旧地形を現在に留めていたために現存していた。

火葬墓は、地山面に直径約70cm、深さ約10cmの浅い墓壇を掘り、墓壇中央に5～10cm大の小石を置き、その上に蔵骨器を置いている。上部はこの墓壇を掘った際の残土が盛土の一部として利用されている。盛土は直径約1.5m、高さ約0.3mの規模である。墓壇内に副葬品は無い。蔵骨器内に少量の火葬骨が収められている。

図4は土師器杯である。ゆるやかに外上方へのびる体部よりわずかに外反する口縁部をもつ。口縁端部は上方に立上り、尖がり気味に終わる。平らな底部に貼付け高台をもつ。暗文は無い。口径22.5cm、器高4.7cm。

図5は図4の蓋である。土師器で、平坦な頂部よりなだらかに下がる口縁部をもつ。頂部中央に、上面がわずかに隆起する扁平なつまみを有する。口縁部はわずかに外反し、丸く終わる端部をもつ。口径23.4cm、器高3.2cm。この2点は、平城京SD485出土例に近い特徴をもち、8世紀前半と考えられる。東大阪市遺跡保護調査会保管。



第3図 出土蔵骨器（1・2・10は「原始・古代の枚岡」第1部より転載）

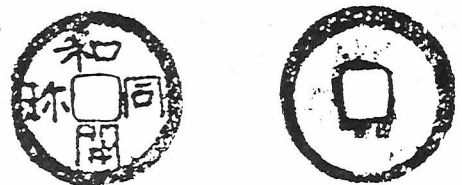
4. 第3図6 昭和36年、日下町通称「正法寺山」、南斜面から出土した。工事中に発見されたもので、約30cmの墓壇があり、蔵骨器のまわりに木炭がつまっていたとされている。蔵骨器内には土がつまっており、若干の火葬骨が確認されている。また、同時に径約10cmの土師器皿2点が出土している。墓壇内かどうかは不明である。

図6は須恵器薬壺で、口縁部は欠損している。やや張りのある肩部から下方に屈折する。底部にしっかりとした貼付け高台を有する。底径12.5cm、最大腹径24.0cm。平城京S D 485出土例に近く、8世紀前半頃と考えられる。東大阪市立郷土博物館保管。

5. 第5図7 昭和41年、中澄昭彦氏によって発見された。辻子谷の北岸、標高約160mの尾根上に位置している。破片として採集され、墓壇、火葬骨の有無については不明である。

図7は、須恵器広口壺で、短かく外反する口頸部から、さらに外上方へのびる口縁部をもつ。口縁端部はヨコナデのためやや立上がり気味となり丸く終わる。胴部は弱い張りをもった肩部から、ゆるく下方に屈折する。肩部の稜は比較的明瞭である。底部は欠損しているが、高台をもたない平底と思われる。胴部外面に粗いヨコナデ、底部内面に粗いナデ、他に丁寧なヨコナデを施す。口径14.0cm、底径11.2cm、器高11.5cm。平城京S D 485出土例に近い特徴をもち、8世紀前半と考えられる。東大阪市、中澄幸彦氏所蔵。

6. 和銅開珎 5に隣接する標高160cmの尾根上で昭和35年中澄昭彦氏によって発見された。一辺約1.5mの方形の石組があり、その中に土師器壺があったとされている。火葬骨が確認されており、火葬



第4図 和同開珎拓影（1/1）

墓として考えられている。他に須恵器蓋が2点出土している。和銅開珎は蔵骨器の中に収められていたかどうかは不明である。直径2.4cmを計る。銀製で、古和銅と考えられる。

7. 第5図8・9 昭和27年、上石切町一丁目において発見された。帝塚山大学教授堅田直氏によって調査、報告されている。蔵骨器内には灰、骨粉化した火葬骨が検出されている。

図8は土師器把手付壺である。やや肩の張った球形に近い胴部より、わずかに外上方にのびる短い口縁部をもつ。口縁端部は丸く終わる。底部に低い貼付け高台を有する。肩部に1対の把手がついている。口径14.0cm、底径14.5cm、器高21.0cm。

図9は図8の蓋である。土師器で、扁平なつまみをもつ水平に近い天井部から外方へのびる口縁部をもつ。端部は丸く終わる。口径22.5cm、器高5.0cm。8世紀後半頃と考えられる。堅田直氏所蔵。

8. 第3図10 明治初年に小松重一氏によって発見された。辻子谷の北岸、標高約35mの扇状地上部に位置する。現在の地番は中石切町2丁目である。凝灰岩の石材とともに2枚の板状土製品が出土し、その一方が現存している。残りの1枚に墨書があったとされているが不明である。現存する図10には墨書の痕跡が残っている可能性もあり、この2枚は墓誌板と推定されている。図10は、長辺28.5cm、短辺9.3cm、厚さ0.8cmを測り、表面は非常に丁寧なナデが施されている。周囲は全て面取りされており、丁寧なつくりである。東大阪市立郷土博物館保管。

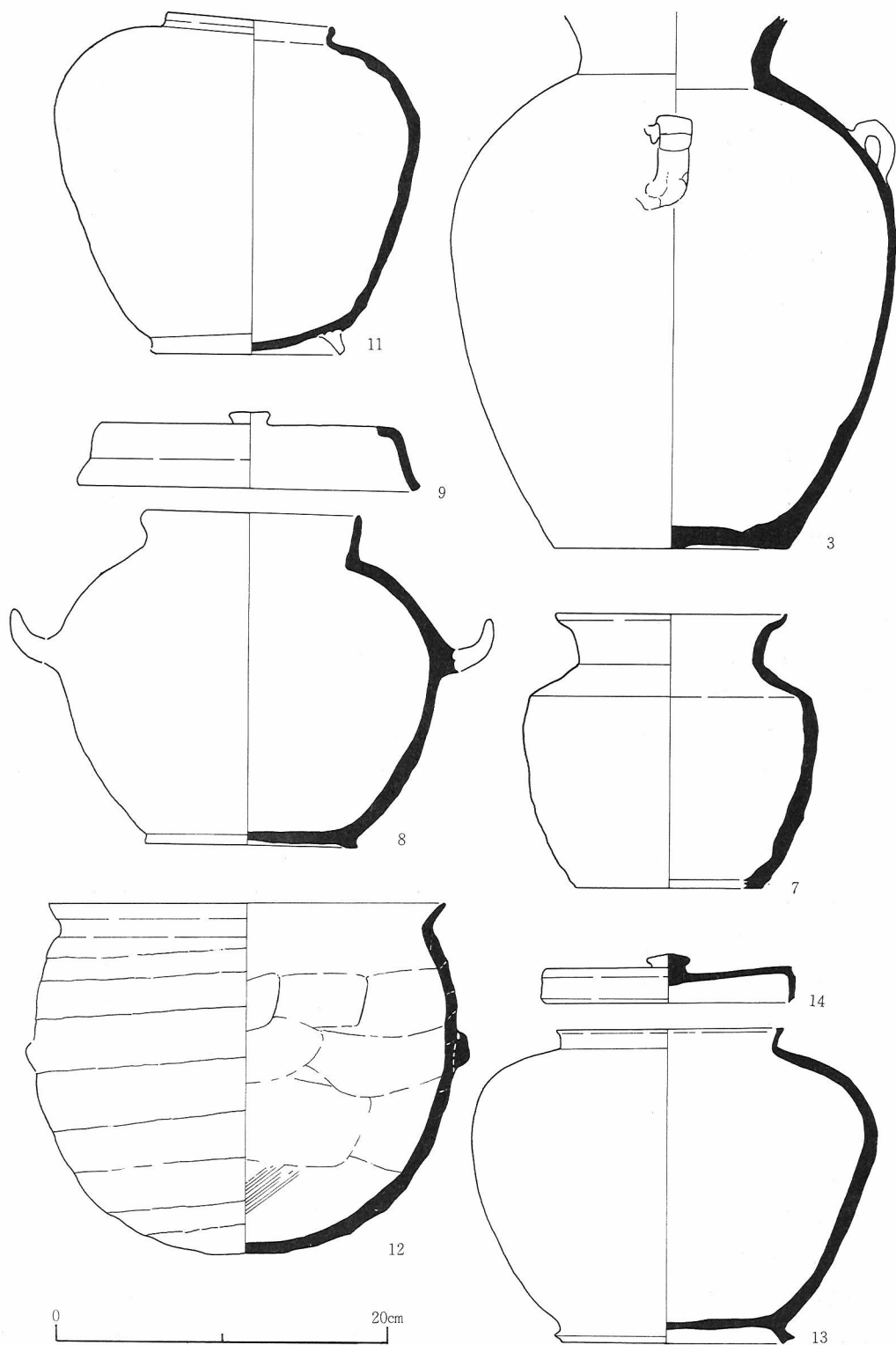
9. 昭和30年代に辻子谷の南岸、標高約50m付近で小形の須恵器壺が発見されている。火葬骨等については不明であるが、石組があったと伝えられており、火葬墓の可能性が高い。

10. 第5図11 昭和54年、上四条町標高500mの尾根南斜面で発見された。積石があり、その中に蔵骨器があったとされ、墓壇と思われる浅い凹みが確認されている。周囲に人骨が散乱し、火葬墓と推定された。

図11は、やや張りある肩部から丸みをもって下方に屈折する胴部より、短く直立する口縁部をもつ。口縁端部は丸く終わる。底部に貼付け高台を有する。口縁部内外面、胴部内外面にヨコナデ、底部内面にナデを施す。肩部に自然釉がかかる。口径10.3cm、器高20.7cm。平城京SD650A出土例に近い特徴をもち、9世紀前半頃と考えられる。東大阪市立郷土博物館保管。

11. 第5図12 昭和55年、上四条町、標高約450mの西側斜面で発見された。東大阪市教育委員会の芋本隆裕、下村晴文両氏によって現状調査されている。長径約60cm、短径約40cm、深さ約25cmの楕円形の墓壇をもち、その中に、口縁部を下にして蔵骨器が置かれていた。蔵骨器および墓壇内には炭が多量につまっており、蔵骨器に火葬骨が多く混っている。副葬品はなく、鉄製帯金具（丸鞆）が1点出土した。火を受けたと見られ、同時に焼かれたものであろう。蔵骨器内かどうかは不明である。

図12は、土師把手付甕である。ほぼ球形に近い胴部から、短く外方へ屈曲する口縁部をもつ。口縁端部は、わずかに尖り気味に終わる。口縁部内外面はヨコナデ、胴部外面は粗いナデ、上半は強いヨコナデ調整する。頸部外面に強いヨコナデのため、わずかに稜が認められる。外面の調整が粗く粘土紐の痕跡が明瞭に残る。胴部上半に1対の退化した把手をもつ。口縁部の形



第5図 出土蔵骨器（3・8・9は「原始・古代の枚岡」第1部より転載）

態、退化した把手から平安時代前半と考えられる。東大阪市立郷土博物館保管。

12. 第5図13・14 昭和54年、3人の小学生によって発見され、東大阪市教育委員会、原田修、福永信雄、下村晴文3氏によって現状調査されている。出土地点は善根寺町1丁目標高約65mの南斜面である。地表下約1mにあり、長辺約70cm、短辺約50cm、深さ約15cmの隅丸方形の墓壇内に蔵骨器が置かれていた。上部は、長辺65cm、短辺50cm、高さ約15cmの小規模な盛土が施されている。墓壇内に炭は無く、また、地表面に焼けた痕跡は無い。蔵骨器内には、多量の火葬骨が収められ、その中に釘状鉄製品が入っている。

図13は須恵器薬壺である。張りのある肩部からわずかに丸みをもって下方に屈折する胴部である。口縁部は短くわずかに外反し、端部は内側にやや肥厚し、ほぼ水平な面をもって終わる。底部に貼付け高台を有する。口径13.6cm、底径14.2cm、器高18.8cm。

図14は図13の蓋である。中央に向かって下がる平らな天井部から明瞭な稜をもってやや内弯気味に垂直に下がる口縁部へ続く。口縁端部は尖り気味に終わる。天井部中央に宝珠様の扁平なつまみを有する。口径14.4cm、器高3.0cm。平城京S D485出土例に近い特徴をもち、8世紀前半頃と考えられる。東大阪市立郷土博物館保管。

Ⅲ まとめ

以上12例の蔵骨器は、出土地点毎に分けるとA地区石切町周辺、B地区神感寺周辺、C地区善根寺町の3群に分けられる。A地区は、墓尾古墳群→隣接地甕棺墓・木棺墓→法通寺という墓制の変化をたどる事が可能であり、一連の継続した勢力をうかがい知る事ができよう。墓尾古墳群は、南に位置する山畑古墳群の新らたな築造が終焉をむかえた時期—7世紀初頭—以後、7世紀前半に築造が開始され7世紀中頃には築造が終わっている事が過去の調査例で明らかである。その後、古墳群に隣接した干手寺山周辺において、8世紀初頭の甕棺墓あるいは木棺墓が存在し、火葬墓との間に築かれたものと考えられよう。8世紀以後は、奈良時代～鎌倉時代にあったとされる法通寺が存在し、また、今回紹介した(1)～(9)の如く、8世紀前半から9世紀後半にいたる火葬墓に移行する。これらの事実は、一連の継続する勢力の存在を示唆し、また、この付近一帯が大きな墓域となっていた可能性を考えさせるであろう。遡れば、6世紀初頭の芝山古墳、隣接地出土の石鐙出土などからもうかがえるものではなからうか。

B地区は、奈良県との県境に近く建てられた神感寺を中心としたものである。神感寺は、奈良時代に始まり鎌倉時代まで隆盛を極めた寺として知られている。北側の尾根には、神感寺の南に対する北寺跡があり、その東に北寺跡墳墓群が存在する。この一帯では紹介した2例の火葬墓以外に前記北寺跡墳墓群や、(11)のような積石と思われる自然石が散乱し、今後その出土例は増加すると考えられる。また、備前焼・常滑焼等の中世の蔵骨器が多数発見されており、神感寺の墓域としての性格が考えられる。

C地区においては蔵骨器は1例発見されているに過ぎない。この周辺は戎山古墳、坊主山古墳など後期の単独墳が確認されている。A・B地区に比べ、墓域等の様相は認められない地区

である。当地区については未だ調査が進んでいない事もあって、今後資料の増加を待って検討を加える必要があろう。

参考文献

- 『平城宮発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研究所学報第15冊、奈良国立文化財研究所1962
『平城宮発掘調査報告Ⅵ』奈良国立文化財研究所学報第23冊、奈良国立文化財研究所1974
『平城宮発掘調査報告Ⅶ』奈良国立文化財研究所学報第23冊、奈良国立文化財研究所1976
藤井直正、都出比呂志「原始・古代の枚岡」第1部各説『枚岡市史』第3巻 1966
堅田直「奈良時代の火葬骨壺―石切古墳群域から出土―」『古代文化』1巻2号1952
福永信雄「善根寺町周辺の古代火葬墓」『調査会ニュース』No.14 東大阪市遺跡保護調査会 1979
上野利明「宅地造成工事に伴う墓尾古墳群隣接地の試掘調査」『調査会ニュース』No.11・12
合併号 東大阪市遺跡保護調査会1979
『東大阪遺跡ガイド』 東大阪市遺跡保護調査会1978

追記．脱橋後、北石切町、通称「坊主山」、より須恵器把手付壺が出土していることが判明した。出土状況については不明である。器形からS D 485 出土例に近い特徴をもち、8世紀前半頃と考えられる。東大阪市立郷土博物館保管。